世界で最後の魔王が泣くとき。

神無月によ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界で最後の魔王が泣くとき。

【Ｎコード】

Ｎ１６１５ＢＡ

【作者名】

神無月によ

【あらすじ】

超能力者・雨宮新道率いる桜桜高校オカルト研究部メンバーは、一年前のある日、魔法が存在する異世界へと漂流してしまった。右も左もわからない一行を助けたのは、魔王を名乗る白髪の少女マナ＝ファントム。やがて世界で最後の魔王として公開処刑される、優しい魔物の王だった。

1_プロローグ

世界で最後の魔王は今、たった一人で城を守る結界を張り、敵軍からのやまない猛攻をギリギリで凌いでいた。

かつての仲間たちは、どこにもいない。

完全敗戦してしまう前に全員、国王軍側に寝返らせたからだ。

戦争の勝敗が決した時、どちら側にいたかで、後々、個々の処遇は大きく変わる。

だから、長年この城に仕えてくれた者たちは例外なく、問答無用で忠誠契約を破棄させた。

魔王として最低な行為だったが、後悔はしていない。

もしかすると、現在こちらに攻撃している中には、元部下がいるのかもしれない。

国王軍側に『負け戦だと分かって主を裏切り、反旗をひるがえした魔物』と認識されている以上、信用を買うには仕方がないことだろう。

かつての主に攻撃することで、彼らが生き延びられるのなら、これ以上に喜ばしいことはないと魔王は思った。

ここから先は、人間の時代が始まる。

そうなれば中立の魔物たちの立場さえ危うくなるだろう。

どうにかして、上手く生きていく術があればいいのだが、きっと困難を極めるはずだ。

魔物は今までのように自由にはいくまい。

（余の魔力も、もってあと二分か）

祖父の代から一〇〇〇年以上も続いた歴史ある魔王の古城も、じきに陥落する。

魔王とは言え無敵ではないのだ。
一体分の魔力では、せいぜい城外を包み込む結界一枚の展開が限界だ。
四方八方から降り注ぐ攻撃に、迎撃術式までは構築できない。
籠城作戦は、時間の問題と言えた。
魔王が城内の塔から黄昏時の空を見上げれば、闇色のドラゴンにまたがる空属――通称〈カース〉が飛行している様を確認できた。
まるで死傷を負った獲物が息絶えるのを待つタカのように、遥か上空をグルグルと旋回している。
彼らは、空を愛したがゆえに太古の呪いを受けた五人の空属だ。
ただし、人間としての原型はほとんど留めておらず、下半身はドラゴンの背中と癒着している。
そして上下関係で言えば、人影の方がドラゴンの下僕にあたるのだ。
人一人がまたがれる程度の全長を持つドラゴンは、しかし生物的な外見をしていない。
確かにシルエットだけは立派なドラゴンなのだが、まるで地面に映る影が三次元的な質量を得て立ち上がったみたいに、体の構成物質は霧状のまがまがしい闇でなっているのだ。
それは液体、気体、固体、いずれの性質にも変化できる、暗黒色の魔法物質。
それは、かつて魔法使いたちによる実験でモルモットにされた、ドラゴンのなれの果て。
それは、地対空迎撃術式の魔法でも殺すことができない、正真正銘の怪物。
そして、魔王の城を監視する怪物は、なにも呪われた空属のドラゴンだけではない。
古城の近海を見渡せば、海の怪物クラーケンを従える世界最凶の海賊〈ベリアル〉の布陣が視認できる。
島一つ分の巨体を誇る化け物は水面下にでも潜んでいるのだろう、

まだ姿を現していない。
当然、頭足類の巨大生物を飼いならしていることだけが、世界最凶の悪名を轟かせている理由ではない。
〈ベリアル〉の構成員三〇〇人全員が、手練れの魔法使いなのだ。
そんな海賊たちが駆る船は、たったの一隻。
高度な魔法コーティングが施されている、ホワイトマーメイド号である。
魔王の古城と肩を並べられるほど大型の帆船で、白い外装のいたる場所に、あらゆる方角への追撃を可能とする砲撃術式を搭載している。
見た目からは鈍重なイメージを受けるけれど、印象を裏切るようにかなりのスピードを出せる上に、魔法による潜水航海が可能らしい。
空域も海域も封鎖されている。
こういった調子で残された領域である地上にも、深淵の山族が構えていた。
鬼姫イースリィ＝ハザート率いる、人ならざるモノノケたち。
美しい女性ばかりしか生まれない鬼の一族である。
一見すると人間の女性と違わない姿をしているが、魔力の総量、魔法の手数、驚異的な身体能力は、白兵戦において並の魔法使いとは比べ物にならないという。
こと戦闘においては一体一体でもかなり厄介な種族なのに、今回は総出で出陣しているようだ。
見えるだけで一〇〇体は確認できる。
もはや空も海も陸も、退路は絶たれている。
魔王の魔力も底を尽きる頃合いだ。
そうすれば結界は消滅し、彼らは即座に城内へと殺到するだろう。
ただし、すぐに魔王を討伐するわけではない。
世界最後の魔王――マナ＝ファントムの処刑は、全世界同時中継の公開処刑が予定されているからだ。

人間サイドの勝利を。
魔物サイドの敗北を。
マナの死でもって宣言する。
すなわち、拮抗していた世のパワーバランスを国王軍が完全掌握したことを人間側への証明とし、魔物側への見せしめとするつもりなのだろう。
そんな人間サイドの勝利が確定するまで、あと三〇秒もない。
そんなことはわかっていても、マナは最後の瞬間まで抗うことをやめなかった。
大切な時間を過ごした城を。
ここで紡がれた全ての思い出を。
たくさんの生命が呼吸していた証を。
一秒でも長く、失いたくなかったから。
魔王になってから、いろいろなことがあった。
決して少なくはない記憶の映像が、マナの脳裏をよぎっては消えていく。

（そう言えば、アマミヤたちは無事に戦火の外まで逃げられただろうか）

約一年前、マナの領土である樹海の中で出会った、とても不思議な少年少女たち。

（ちょうのうりょく、だったか）

魔法とは違う、彼らの世界の力。
もっとも、彼らの話によれば、この世界のように技術として体系化しているものではないらしいが。

（できれば、一緒に元の世界へ帰れる方法をさがしてあげたかった

が、それももう叶わぬな）

だからマナにできることは、彼らのために祈る神もないのに両手を合わせることくらいだった。

（すまぬ、父上、母上、皆のもの。余は――）

そして、時間は誰に対しても平等だった。

マナが心の中で謝罪を呟いた瞬間、

（――そなたたちの時間を守りきれなかった）

古城を守っていた不可視の障壁が壊れ――空から――海から――山から――魔王の首を狙う者たちが一斉に押し寄せた。

∞　∞　∞

こうして。

国王軍による『世界で最後の魔王マナ＝ファントム』の公開処刑は、明日、夜明けとともに執行されることが決定した。

2 ―オカルト研究部の超能力者たち

第一章

夕刻時の樹海は、頭上の燃えるような茜空を意に介さず、一足先にほの暗い夜の色を招き入れていた。
界隈に生命の音は聞こえず、不自然なしじまが澄みきった山の空気をぬっている。
アップダウンの激しい獣道は、およそ一年前、桜桜高校オカルト研究部メンバーが迷い込んだ場所に酷似していた。
けれど、ここは『彼女』の領地ではない。
全員、初めて足を踏み入れる未開の森林だ。
異様な緊張に押しつぶされそうになりながらも、彼らは足の動きをとめない。

「いやに静かですね」

移動のさなか、声のボリュームを殺して呟いたのは、オカルト研究部副部長の神無月玲（かんなづき・あきら）だ。
季節に関係なくいつも薄めの和服を着ている、容姿端麗の一八歳。かんざしを通した長い黒髪、みずみずしい白い肌、すらりとした無駄のない体つき、形のいい眉をハの字にして、たまにはにかんだ時の表情など、とても魅力的な少女である。
耳心地の柔らかい滑らかな口調や、人当たりの良い温厚な性格から、メンバー全員に圧倒的な信頼を得ている存在だ。
しかし普段の優しい目つきが、今は剣？な色をたたえて細められていた。

「そうですね。きっと、この静寂は意図的なものなんでしょう。お嬢さまの違和感は、ごもっともです」

左の腰に鞘を帯刀している少年が、辺りに注意深い視線を配りながら淡々と答えた。

桜桜高校の男子制服に身を包む彼は、オカルト研究部メンバーの霧墨絵利亜（きりずみ・えりあ）だ。

『神無月家』に代々執事として仕えている『霧墨家』の長男、一七歳である。

高くも低くもない声や、同年代と比べて華奢な体躯、幼少の頃には『女装が似合いそう』という理由で少々苦い思いをしているほど、中性的な容姿をしている。

霧墨は基本的に、主である神無月のことしか考えて行動しない人間だ。

神無月家、霧墨家以外の者にはぞんざいな態度で接したり、融通がきかないことが多々あるため、他のメンバーと衝突することも少なくない（オカルト研究部に所属しているのも神無月が入部していたからであり、彼の自由意思ではなかった）。

普段はほとんど表情を作らずに冷静な反面、短気で、神無月のこととなると普段の落ち着き具合からは考えられないくらい、周りが見えなくなるきらいがある。

現在も心の中はおだやかではないらしく、霧墨は時々舌打ちを鳴らしながら口早に、

「魔物たちは、息をひそめているんでしょう。近隣で国王軍による大規模な強襲があったのですから、無理もありません」

「い、いつ自分たちの住む森に飛び火するか、ま、魔物の方たちも、心配、なんですよね……」

霧墨の温度のない言葉を聞いて、か細く声音を噛み噛みで発したのは、神咲(かみさき)みくるという少女である。
桜桜高校の女子制服を着衣している、オカルト研究部メンバーの一七歳だ。
明るいトーンの栗毛を肩の位置まで伸ばし、両サイドをピンクのリボンで結んでいる。
おしとやかそうな見た目通り、重度の内気で、人見知りが激しい。
すでに一年の付き合いを越しているオカルト研究部メンバーに対しても、たまに照れを隠し切れず、目を合わせて話せないレベルだ。
けれど、これでもまだ前進した方で、中学時代は引っ込み思案な性格が災いし、暗い女として女子生徒から忌避されていたという。

「要するに地元の皆さん、ピリピリと神経を張り詰めてらっしゃるわけだ。俺たち、けっこうヤベェとこ歩いてんじゃね？」

いささか楽天的な調子で発言したのは、宇佐川(うさかわ・しんじ)慎二、一七歳独身。
こちらの世界に漂流するまでは、毎朝ワックスで髪型をキメて登校していた、我が日本を代表する中肉中背の青春男児である。
根は真面目で良い奴ではあるものの、底抜けに明るい性格ゆえに校内一空気が読めないウザ川と揶揄されたりしていたが、本人はまったく気にしていない。
そして、オカルト研究部メンバーの、とある少女にゾッコンラブしているドM男でもある。

「ていうかさ、雨宮。ちょっと交代しようぜ。俺だって充電中の神楽ちゃんをオンブして密着したいんだ！」

列の先頭を歩くオカルト研究部部長と、その背で眠る少女に向かって、宇佐川はダダをこねるように進言する。
すると、宇佐川の比較的近くで徒歩していた霧墨が、残像すら置

き去りにするスピードで腰の剣を抜刀し、

「黙れよ、宇佐川なんとか。貴様の声がでかいせいで、魔物たちが寄ってくるだろうが。それでお嬢さまの身にもしものことがあったら、貴様はどう死んで責任をとるつもりだ？」

プロの殺し屋にも劣らない凄みの眼光と声質でもって、宇佐川の首筋に剣を添えた。

宇佐川は冷や汗をにじませながらバンザイのポーズで硬直し、口元だけで抗議する。

「ち、ちょっと霧墨氏？　俺の責任問題の処理は、死が前提なのですか？」

「当然だ。これ以上の譲歩はない」

「えっ、譲歩してたんだ！？」

「だから大きな声を出すなと言っているだろうが、バカが！」

「なっ、失礼な！　バカとは何だバカとは！　こう見えて成績は悪くなかったんだぞ！」

「どうして言外に死ねと言われた時よりもキレているんだ、煩悩が！」

鼻息を荒くして、にらみ合う二人。

そこで霧墨の主である神無月が、彼の右肩をトントンと叩いた。

「霧墨くん」

霧墨ははっとなって剣を引き、振り向きながら頭を下げる。

「……ッ、すみません、お嬢さま。お見苦しいところを――」

「いえ、それどころじゃなさそうですよ、霧墨くん」

「？」

顔を上げ、小首を傾げそうになったところで、ようやく霧墨は、神無月が困ったような微笑を浮かべている原因を知った。

幼稚園や小学校の時、遠足で行った動物園。

そこで見た立派なトラよりも図体が三倍はある四足獣の魔物に、彼らは包囲されていた。

数は五体。

肉食獣さながらの緩慢な挙措は、獲物を追い詰めたライオンのようだ。

こちらとの距離を、円周軌道で確実に詰めてきている。

「あ、あれ……これ、まずくね？」

わずかに焦燥が混じっているものの、まだ能天気そうな宇佐川の言葉を皮切りに、オカルト研究部メンバーは一斉に背中合わせになって、なるべく互いの死角を作らない立ち位置に移動した。

「ああ、まずいな」

一七歳にして一七九センチの長身を誇る稲葉泉（いなば・いずみ）が、低い声で端的に相槌をうった。

長めの黒髪と凛々しい顔立ち、スポーツでもしていそうな体格の

少年である。
眉目秀麗な容貌で異性の気を引けそうなものだが、学園生活ではひたすらに寡黙だったせいで、女子生徒はおろかクラスの男子すら彼に寄りつかなかった日々を過ごしている。
その日一日、誰一人として稲葉の声を聞かなかったということがあるくらいだ（決して無愛想なわけではないのだが、無口な態度から、『付き合いの悪い人間』と認識され、中学時代は友達が一人もできなかった）。
そんなルックスだけは良い稲葉が、『まずいな』と言った。
要するに、それだけのピンチな状況ということだ。

「めったに口を開かない泉くんが、そんなこと言うから、ほら黒乃くんが怯えてるよ？」

稲葉の幼馴染み・岸光（きし・ひかり）が苦笑いしている。
ボブカットの茶髪と繊細な顔立ち、『話しやすい美人』であることから、桜桜高校において一年男子より人気ナンバー1を勝ち取っていた一七歳の美少女だ（一年前の話だが）。
彼女は唯一、この中でオカルト研究部に所属していない一般生徒だった。
そんな巻き込まれ型美少女・岸光の視線の先には、彼女が口にした黒乃という名の少年がいる。

「うわぁ怖いよ怖いよ食べられちゃうって逃げようよ今すぐ逃げようよああでもどこに逃げれば良いんだろう囲まれちゃってるしもう絶対絶命だよぉ」

とにかく気弱で、優柔不断で、臆病で、ネガティブ思考で、メンタル面がもろい一七歳の草食系男子・黒乃純白（くろの・じゅんぱく）は半べそになって頭を抱えていた。

紐みたいに細い体は、喧嘩もしたことがなさそうなくらいヒョロリとしていて、惨めに涙を浮かべている様子は女々しく、情けない。

「大丈夫だよ、純ちゃん。私がついてるから」

そんなダメ男子黒乃の手をとって握りしめるのは、彼の許嫁――白瀬黒羽（しらせ・くろは）だった。

愛嬌のある可愛らしい顔立ちで、いつも笑顔を絶やさず、何事にもポジティブシンキングな天真爛漫少女だ。

不屈の心と、将来の婚約者への惜しみない愛情、意外と発育のいいボディで、ネガティブ黒乃を支えている良きパートナーである。

「く、黒羽ちゃん……」

天使のような笑顔を咲かせる恋人に励まされ、黒乃の瞳にも、かすかな希望の光が宿り――

「純ちゃん、安心して。心配しなくても私たちはずっと一緒だよ。一生側にいるから。魔物さんたちの胃袋の中でも、そこで消化されたあとでも、たとえう〇ちになってでも、私たちは永遠に離れないよ」

――希望の光が消えた。

「うわあああああああああああああああああう〇ちはいやだあああああ！！」

泣き叫ぶ黒乃の声に刺激されたのか、先刻よりも肉薄してきている四足獣の魔物が体勢を低く屈めた。

牙をむき出して、威嚇するようにうなる。

警戒だった獣の瞳が、明確な敵意に塗り替わった瞬間を直視して、夢村（ゆめむら）しをりは青ざめた。

「だあああ、もううっさいわね！　こんな時にラブコメやってんじゃないわよ！　あんたたち状況、分かってんの！？　ＴＰＯを考えなさいよ、ＴＰＯを！」

『とある理由』で金色に染めた髪と、だらしなく着崩している桜桜高校の制服、その汚い言葉遣いから、社会より不良というレッテルを当たり前のように張られた一七歳の少女が、怒鳴る。

「黒羽、そのチキン野郎はやく黙らせて！」

「うん、任せて！」

「まだ死にたくないよおおおおおおおおおおおおおお――むぐっ」

黒羽の大胆な行為に、場が凍りついた。

「ほら、純ちゃんってば、私がちゅーすると大人しくなるんだよ☆」

ニッと皆に向かって得意気にピースする白瀬の隣で、黒乃は顔を真っ赤にしてうつむいていた。

「……ま、まあいいわよ、大人しくなってくれたのなら」

若干、夢村が引いている。

こころなしか、四足獣たちも引いている。

「それで実際問題、どう切り抜けますか？」

隣に並ぶ神無月がそう問いかけてきたので、夢村は魔物たちの動きから一秒も目を離さずに答える。

「あら、意外と余裕ね、先輩」

「そう見えますか？」

夢村の視界には映らなかったが、おそらく神無月はにっこりと微笑んだ。

途端、夢村は右半身に微熱を感じ取った。

気のせいではない。

命の危険を察して、緊張しているからでもない。

明らかに神無月という少女のせいだ。

「にししィ、ねェ、夢ちゃん。いいのォ？　こいつら、ヤっちゃって、いいのォ？」

夢村が必死になって状況を打破する計算を脳内で巡らせていると、今度は左隣で構えている超猫背少女が話しかけてきた。

夢村は半ば無意識的に応じる。

「独断専行はだめよ、桜。あんたは大事な主戦力なんだから、私の合図を待ちなさい」

「にししィ、了ォ解ィ」

ゆらゆらと体を左右に揺らしながら、敬礼する月島桜（つきしま・さくら）。

深刻な寝不足が疑われるくらい、目の下のクマが半端ではない一七歳は、とりあえず色々と病んでいる女の子だ。

この月島と同等に世話が焼けるメンバーと言えば、

「……キテル？」

「――ウン、キテル」

片山右京（かたやま・うきょう）と、片山左京（かたやま・さきょう）の双子だろう。

いつも何もない虚空を凝視している一八歳の先輩姉妹である。

放置しておくと、電波に導かれるようにフラフラとどこかへ行ってしまうような二人だ。

ちなみに、ＤＮＡ爆発によって二人を見分けるには、ホクロを確認する必要がある。

右頬に泣きホクロがある方が右京で、左頬に泣きホクロがある方が左京だ。

それから、とっておきの奇人変人。

オカルト研究部の部室にくる時は必ず黒子姿で、いまだ正体不明の存在――黒子さん。

体格からして男だと、夢村は推測している。

「って……あれ？」

「どうしました？」

背中を預けている仲間たちを肩ごしに素早く見渡して、ふいに夢村は声をあげた。

神無月が怪訝そうに訊ねると、

「雨宮のクソが……いないわ」

束の間の、空白。

そして、

「「「「「えええええええええええええええええええええええ！？」」」」」

「どーりで神楽ちゃんの姿が見当たらなかったわけだ！　あのヤロー、宇佐川慎二の人生物語におけるメインヒロインを横からさらいやがった！」

「宇佐川くん、神楽ちゃんの姿がない時点で雨宮くんもいないことに気づきましょうよ。彼女を背負っていたのは、彼なんですよ？」

いきりたつ宇佐川に神無月が優しく語りかけると、霧墨が小さく舌打ちして、

「宇佐川慎二……つくづく使えない人間だな。魔物と戦闘におちいった際は、どさくさに紛れて偶然、僕の手元が狂い、この剣がすべって奴に刺さらないだろうか。努力はしよう」

「霧墨氏、霧墨氏、聞こえてるし、努力する方向間違えてるし、偶然という言葉の意味をはき違えてらっしゃいますよ」

号泣する宇佐川。

その一方では、夢村が悪態をついていた。

「いや、マジでどこに行ったのよ、雨宮のアホは！」

「い、いつ、食べられてしまったんでしょうか？」

「にししィ、さらりと愉快なこと言うねェ、みくるちゃん？」

「逃げたのでは？」

稲葉が眉ひとつ微動だにせず言うと、傍らの岸がフォローを入れる。

「泉くん、もうちょっと部長のこと信用してあげたらどうかな？」

「まあ、奴は今いてもいなくても……むしろいたら足手まといだ」

「だからストレートすぎるよ、泉くん」

「……キテル？」

「――ウン、キテル」

「ちょちょちょちょ、ほんとにくる！　ほんとにくるよ、ぎゃあああああ！」

黒乃がわめき散らしながら、前方を指をさす。

夢村がそちらに顔を向けると、先の皆の大声によって逆立つ神経を刺激された四足獣の魔物五体が興奮状態で、いよいよこちらに突進を開始したところだった。

∞　∞　∞

その時。

「仕方ない。宇佐川の血は、あとで吸わせることにしよう。お嬢さま、危険ですので下がっていてください」

「だから霧墨氏、聞こえてるからね？」

宇佐川のツッコミも耳に入らないほど集中しているのか、霧墨絵利亜は無言で腰を落として、帯刀する剣の柄に右手で触れた。

刹那、踏み込みの動作で重心を前方へと移動させる。

その所作と連動し、霧墨は抜刀の要領で鞘から剣を引き抜いた。

銀色の軌跡。

剣閃は、鋭い真一文字を描いた。

迷いのない太刀筋。

威力も速度も申し分ない。

けれど、霧墨の剣が切ったものは空気だけだった。

魔物がまだ間合いに入ってきていないのだ。

――なのに、五体いる魔物のうち一体が、喉笛を掻き切られ、地面に血だまりを作って倒れ込んだ。

「悪いね、僕には間合いもタイミングも、あまり関係ないんだ」

霧墨絵利亜は――超能力者だった。

自らが放った斬撃を、任意の空間にテレポートさせる超能力。

離れた位置にいる標的も、タイムラグなしで斬りつけることが可能な力である。

無論、四足獣の魔物を一撃で屠れるほど霧墨の剣術は卓越していない。

超能力こそ有しているが、彼は魔法も使えないただの人間だ。

ゆえに、全ては彼がたずさえている剣にこそ秘密がある。

「お見事です、霧墨くん」

『特性の剣』を鞘に収める霧墨を微笑で讃えながら、神無月は右腕

を自身の胸の高さまであげた。
地面とは平行に、スッと音もなく五本の指を伸ばす。
そこで、神無月の目つきと雰囲気が一転した。
直後、謎の発火現象が巻き起こる。
炎の波が意思をもった生き物みたいに渦を巻き、一息に二体の魔物を食い潰す。
余波が神無月や霧墨たちの前髪を揺らした。
神無月の超能力――パイロキネシス。
その圧倒的かつ容赦ない火力に飲み込まれた四足獣は、一〇秒を待たずに息絶えた。

「お嬢さまも、素晴らしいお手並みでした」

霧墨が落ち着いた声で賞賛を口にすると、神無月はいつも通り、綺麗な眉をハの字にして柔和にはにかんだ。

∞　∞　∞

その時。
残りの魔物は二体――いや、すでに一体になっていた。

「にししィ、大したことないねェ」

白目を剥いて泡を吹く魔物の背に、月島桜があぐらをかいて座っていた。

「あいつ、マジか……」

宇佐川が感嘆とも驚嘆とも取れる声をもらす。

「もう、あれだな。あの子は一人でもこの世界で生きていけそうだな。超能力なしで、魔物一体を撃破できちまうなんて、人間の限界越えすぎだろ。素手とか、もうどうコメントすればいいのかわかんねぇよ。つか、月島の超能力って何だったっけ？」

「スプーン曲げよ」

「役に立たねぇ！」

夢村が答えると、宇佐川は律儀にツッコミを入れた。

∞　∞　∞

その時。

残り一体の魔物が、黒乃と白瀬に狙いを定めて肉薄していた。

「な、なんかこっちきたあああああああああああああああああああ！！」

「大丈夫、純ちゃんは私が守るよ！」

魔物は疾駆の運動エネルギーを利用して、前足を強く振り上げた。成人男性の体にも等しい大きさの、筋肉質な右前足が空間ごと引き裂くような勢いで降り下ろされる。

完全にビビって動けずにいる黒乃。

頭上から降り注ぐ猛威を防ぐため、白瀬は横合いから恋人を突き飛ばし、自らも地べたと倒れ伏す。

致命傷は回避できたものの、魔物の爪が白瀬の肩口を切って出血させた。

「痛ッ」

愛すべき白瀬の苦悶の声が耳だに触れた途端、硬い土の上にしたたかに打ちつけた背中の衝撃も、黒乃の中では意識外に吹き飛んだ。

「黒羽、ちゃん……？」

彼が涙目を丸くして、自身の体の上に覆い被さる白瀬の名を呼ぶと、

「だ、大丈夫大丈夫……。ちょっと引っかかれただけだよ」

ぺろりと舌を出して、ウインクする白瀬。

無理して笑みを作ろうとしているが、額には汗がにじみ、肩の傷口からは赤い血が流れていた。

そして――恋人の傷ついた姿を視認した黒乃純白の顔から、あらゆる表情が消えた。

涙のあとだけを両頬に残して、彼はゆらりと立ち上がる。

何か威圧的な挙動をとったわけではない。

なのに、黒乃を取り巻く空気の感触がゾォッと変化した。

「や、やべぇぞ、皆……！」

その光景を見た誰かが、恐る恐ると呟いた。

「逃げろ！　純白がキレたぞ！！！」

3＿悪女と中二病

∞　∞　∞

同時刻。
オカルト研究部が四足獣の魔物五体と遭遇、および交戦している頃。
神無月たちがいる位置から北に数キロばかり離れた森の中、一二歳と思しき幼い黒髪の少女が夕闇に染められ、独りで泣いていた。
親か誰かとはぐれたのか、周りには誰もいない。
彼女はうつむき、こぼれる涙を手の甲で拭いながら鼻をすすっている。

「お嬢ちゃん、どうしたの？　迷子？」

そこへ、狩猟用の木製道具を持つ村人らしき男たち三人が通りかかって、心配するように彼女のもとへ歩み寄った。

「お父さんと、はぐれちゃったのかい？」

男は少女の目線に合わせるため腰を落とし、優しくたずねる。
すると、服の袖で涙を落とす少女は、細い肩を小刻みに震わせ、軽くしゃくりあげながらも、コクンと小さく頷いた。

「よし、わかった。それなら俺たちが一緒にお父さんを捜してあげよう」

「お嬢ちゃんのお名前は？　言える？」

「ぐすっ……リン、ですっ……」

鈴の鳴るような声は、涙で濡れていた。

舌足らずの喋り方は、外見相応の幼さを感じさせる。

「そっか、リンちゃんね。じゃあ、さっそくお父さんを捜しに行こう。完全に夜になっちゃう前に見つかればいいけど」

少女はそこでようやく頭をあげて、男たちに顔を見せた。

まるで人形のように完璧な黄金比を持つ、絶世の美少女だった。

前髪は眉と目の間で綺麗なカットで整えられ、他の部分は小さな顔を包み程度まで伸ばされている。

くっきりとした二重の下に、長いまつげが添えられた大きな瞳は、ネコを思わせた。

血色がよく健康的な白い肌は、まだ誰も触れたことがないかのように美しく、みずみずしい。

薄い桃色の唇は、甘く溶けてしまいたくなる誘惑を生み出している。

目にしただけで全身に鳥肌が立つような、そんな幼くも美麗な少女が上目遣いで言った。

「ありがとう、おじちゃん」

「なに、お互いさまさ。気にすんな」

「そうだぜ、嬢ちゃん。困った時こそ助け合わなくちゃな」

「こいつらの言う通りだぜ。はやいとこ、お父さんを見つけよう。なに、心配すんな。大声で叫べば、きっとすぐに見つかるさ」

爽やかにサムズアップする三人の男たち。
この人たちについて行けば、なんとかなる。
そう無条件で信頼できるほど、彼らの存在は夜に近い樹海の中では頼もしかった。
それなのに、少女の表情はいまだ晴れない。
彼女はポツリと、言葉を落とした。

「ありがとう、おじちゃんたち。……でもね？　二つだけ」

「？　二つだけ、何だい？」

再びうつむいて前髪の影を目元に落とす少女を、男たちは初めて怪訝に見下ろす。

「二つだけ、おじちゃんたちに教えてあげなくちゃ」

「うん、何を？　言ってごらん？」

少女は素直に首肯して、

「二つだけ――」

そして。
彼女が小さな顔をあげた時。
そこには、小悪魔を彷彿とさせる意地の悪い微笑が浮かんでいた。

「二つだけ、同情に値する君たちに、アタシからの忠告をプレゼントしようと思うわけだけれど？」

彼女の人柄を知らない者からすれば、豹変と言っても過言ではない変化だったかもしれない。
ただし、実際にはかぶっていたネコの皮を脱ぎ捨て、本性をさらしただけに過ぎない。
先程までの保護欲など微塵もわかない、悪意に満ちた様相こそ、本来の彼女を語るに相応しいのだ。
およそ汚れも知らない純情可憐な少女という印象が、たった一度の醜悪な笑みで崩壊した瞬間。
形の良い唇の端が、人を見下すためだけにつりあがり、陰惨な笑顔を作り出すためだけに八重歯をあらわにする。
いきなりのことに驚きの面様を示す男たちの真正面で、少女は彼らの反応を観察の双眸で嬉しそうに眺め、

「まず一つ目。この樹海は、人間たちの間では、けっこう有名な魔物の巣窟らしいよ。だから、この周辺には人里がないんだね。ゆえに狩猟に出るにしても、人間たちはこの森を狩り場にしない。……まあアタシたちはワケあって、仕方なくここを通るしかなかったのだけれど、そこは例外だよ」

先刻までの舌足らずな話し方もどこ吹く風、少女は饒舌に音をつむぐ。
にやにやと笑いながら、弱者をなじるように。

「で、半年ほど前だったか、マナに聞いたことがある。中には人間の子供が大好物な魔物がいると」

「……」

「なんでも彼らは擬態能力に長けているらしく、森に迷い込んだ人間と同じ人種に化けることで獲物を安心させ、そのまま自分たちの

巣までお持ち帰りするらしいよ。心当たりはないかい？」

少女はわざとらしい質問を口にした。

ガラス玉のように透き通った瞳を内包する目のフチと、唇が三日月型になっている。

「おや、そう言えば君たちは、ここで何をしていたんだい？　そんなみすぼらしい『即席の狩猟用道具』なんか持って、さ。この樹海が魔物の巣窟だと知らなかったのかい？　だから、そんな貧相な武装で、こんな日が沈む時間帯に、たったの三人で、狩猟なんかを？　だから、迷子のアタシを助けられるくらいの余裕があったのかい？　はは、だめだね。無知は身を滅ぼすよ」

少女は、反論を言語化できない男たちを追い詰める。

話の落としどころへ、誘導するように。

「なんだか、アタシ、おじさんたちのこと不審に思えてきちゃった♪」

けれど、今度は愛嬌のある笑顔、だった。

それまでの人を食ったかのような態度が嘘みたいに、見た目に準じた愛らしさ。

軽く首を傾げて見上げてくる百面相の少女に、男たちはたじろぎながらも、なんとか否定の言葉を発した。

「お、俺たちが魔物？　何を言い出すんだい。そんなわけないよ、お嬢ちゃん」

「そうだぜ、嬢ちゃん。俺たちはほら、どこからどう見ても君と同じ人間だろう？」

男たちが口々に唱えると、少女の様相がまた変動した。
それはもう心底つまらなそうに、気だるげな声音で、
「そうだね。君たちの姿は、どこからどう見ても人間にしか思えない。どうしようもなく――ジャパニーズだよ。こんな異世界の樹海で日本人に出会えるなんて、まさに驚愕さ。でも、君たちは驚かないんだね？」
「ニ、ニホン人？　嬢ちゃんは、一体何を言って――」
「いや、もういい。もう飽きたよ」
吐息をついて、少女は男の言葉を遮った。
いつの間にか冷たい色に染まっている彼女の瞳からは、男たちに対する関心が失われている。
「その擬態能力は高度で素晴らしいけれど、今回は裏目に出てしまったね。まあ、そもそも君たちの登場自体が、不自然だったわけだけれど。……ああ、つまらない」
少女が手元で爪をいじりながら、どうでも良さそうに語った次の瞬間――
男たちの両足が地面から離れ、その体が虚空へと浮上した。
けれど彼らの体を支え、持ち上げているものの正体は見当たらない。
まるで透明人間の大男が彼らを抱え上げているみたいに、視界に物質的な情報は映らなかった。
唐突な事態に、魔物の疑惑を向けられた彼らは、空中でジタバタと見苦しくもがく。

しかし不可視の力からは逃れられない。
抜群の安定感でもって、男たちの体は地上三メートルほどの高さで固定される。
そして現象は、まだ終わらない。
男たちの首筋に、人の手の形をした窪みが生まれた。
そう、誰かが彼らの首を締めあげているみたいに。

「……ぁっ、が……」

男たちは必死の形相で首元を掻きむしるが、不可視の握力に触れることすらできなかった。

「そういうわけで、もう一つの忠告、拝聴してくれるかい？　アタシとしては、こっちの方が重要なんだよ」

ふぅ、と肩の力を抜き、少女は特に表情を作らないまま、宙に捕らわれた男たちを俯瞰するように、

「アタシは自分の名前をあまり気に入っていない。リン？　ふざけないで欲しいよ」

言葉を唾みたいに吐き捨て、黒髪の少女――神楽坂凛（かぐらざか・りん）の両目が刃物じみた鋭さを放った。

「アタシは神楽。これからは、ぜひそう呼んで欲しい。よろしく頼むよ」

∞　∞　∞

擬態を解除して観念した人型の魔物三体を、小悪魔系少女・神楽

坂が拘束している。
とは言え、いくら神楽坂がドSだとしても、拘束具を常時持ち歩いているわけではない。
三体の魔物を捕獲しているのは彼女の超能力――サイコキネシスだ。
不可視の念力による抗いがたい圧力が、魔物たちの心を完全に折っていた。

「ふむ、任務遂行ご苦労だった。相も変わらずの素晴らしい手際には、私も感心するばかりだ、凛くん。ふふ、さすがは我が組織きってのエリート、と言ったところか。おかげでプロジェクト『神に至る真実の調べ』のフェード一〇三αから一〇九βまで消化でき――ぐえっ」

「雨宮、アタシは誰だ？」

「あ、はい、神楽さんです。グッジョブでした。お疲れ様です」

茂みの中から無駄の多い動きで姿を現し、神楽坂のサイコキネシスで胸ぐらを掴まれたのは、オカルト研究部部長にして桜桜高校一の奇人変人――雨宮新道だった。
見た目は平凡で特筆するべき顔立ちもしていないため、描写を割愛させていただく一七歳の少年だ。
つまるところ、彼の異常性は外見ではなく、中身にある。
それは後々、分かってくることだ。

「もっと功績を褒めてくれても良いんじゃないのかな？　このアタシの美貌とハニートラップ作戦がなければ、アタシたちはずっと森の中をさ迷うハメになっていたかもしれないんだからね」

「い、いや今回の作戦はハニートラップなどではない。大体、神楽の幼児体型で寄ってくるのは、せいぜいロリコン紳士――」

「ハハハハハ、非常に興味深い発言をしてくれるじゃないか、ねぇ雨宮？」

魔物たちにすら向けなかった神楽坂の殺気が、なぜか今仲間である雨宮に厳しく刺さっている。

薄い桃色の唇はゆるやかな弧を描いているのに、瞳の奥は据わっていた。

神楽坂は魔物三体を封殺しながら、器用にサイコキネシスで雨宮の首もしめつける。

「もう一度、言ってもらおうか？　ん？　誰が一七の高校生にもなって、身長が一四一センチで止まり、体重は四〇キロ、スリーサイズ上から順に六七・四八・六九の幼児体型だって？」

「だ、誰もそんな具体的な情報は開示していなギブギブギブ！！」

「おや、欲しがるね。仕方ない。お望み通り、与えてあげよう。君にひどい暴言を吐かれたのにもかかわらず、アタシは君の願いを叶えてあげるんだ。仏顔負けの慈悲に涙するといいよ」

「きゅう……」

神楽坂の中に、仏の顔は一度すらなかった。

魔物たちは肩を寄せ合い震え、雨宮新道は登場早々、自身の中二病っぷりをアピールしただけで気絶する。

しかし、それでは神楽坂も荷物が増えるだけだ。

彼女自身は怪力でもなんでもない。

ゆえに、すでにこの空間の支配者とも呼べるサディスト少女の、本領が発揮される。

「雨宮、気絶している場合ではないよ。もう、ほとんど日が暮れかけている。これ以上、この樹海にとどまるのはナンセンスだ。神無月たちとも、はぐれたままなのはマズい。どうにかして、彼らと合流しなくては、アタシたち二人だけでは、いずれ無力になってしまう。だから、さっさと起きたまえ、雨宮。こうしている間にも、アタシの充電は枯渇しているんだよ？　こんな天気では君など、ただの中二病をこじらせたイタい少年に過ぎない。まったくの役立たずだよ。だから、ほらほら、目を覚ましたまえ」

神楽坂の唇より次から次へとセリフが紡がれている間、雨宮新道はサイコキネシスによる往復ビンタをずっと食らっていた。

神楽坂の表情は、ちょっと楽しそうな模様だった。

そうして視覚に映らない往復ビンタが、やがて三ケタに達しようかとした寸前、頬を真っ赤に腫らした雨宮が覚醒する。

「うっ……俺という身に一体、何が？　はっ、まさか、また私の中の別人格が？　くっ、こんな時までアイツは俺の体の主導権を……敵は外側だけじゃないということか。……ふふ、だが後一歩のところで届かなかったようだな、シュレディン＝シュバルツ。貴様はイタタタタタタタタ神楽さん耳たぶ引っ張らないで」

「雨宮、妄想を垂れ流している場合じゃないよ。そろそろ本気で移動しないと、アタシの充電も底を尽きてしまう。なにせ、最低ラインの六時間しか眠れてないんだからね」

「う、うむ。ならば、早急に次のミッションに移行するとしよう。おい、魔物ども。私たちを人がいる街まで誘導しろ。……嫌だと言

ったら？　だと？　面白い。なら……試してみるか？」

ふっ、と雨宮はニヒルに笑みを作るが、魔物たちは一度も発言していない。

「ククク、なら思い知らせてやろう。我が呪われた真名を耳にしてぶべっ」

一向に話が進まないので、神楽坂は無感動に雨宮を黙らせる。

その方法は、やっぱりサイコキネシスによるものだ。

調子をこいていた雨宮をそのまま放置して、

「取引だよ、魔物。アタシたちを人里まで案内すること。そうすれば、君たちを殺さずに解放してあげよう。アタシもべつに魔物狩りしたいわけじゃないんだ」

悪女めいた笑みを表出する神楽坂。

ここで彼らが拒否すれば、彼女は問答無用でサイコキネシスの圧力を強めるつもりだった。

けれど、魔物三体は保身に走った。

コクコクと何度も頷く。

「素直でよろしい。では、さっそく案内してもらおうか」

少女は満足そうに頷き、不敵な破顔を表したのだった。

4_樹海の中で

∞　∞　∞

雨宮新道、神楽坂凛を除くオカルト研究部メンバーの視界は、分厚い煙に包まれていた。
辺りには、土と肉が焼ける焦げ臭い異臭がわだかまっている。
間近で爆音を耳にしてしまったため、聴覚の回復には多少の時間を要した。
「ゲホッ……ゲホッ……、痛ッ。クソ、神楽ちゃ――はいないんだった。おい、皆、無事かよ？」
人生設計に『神楽の名前を呼べる世界で唯一の男』になることを夢見ているおめでたい少年・宇佐川慎二が咳き込みながら仲間たちの安否を確かめた。
彼がうつ伏せに倒れた状態のまま意識の混濁を振り払うかのように、かぶりを左右へ振っていると、
「ええ。こちらは、なんとか五体満足です」
パイロキネシスの超能力者にしてオカルト研究部副部長・神無月玲がゆっくりと立ち上がり、着物に付着した汚れを手で払い落しながら応答する。
神無月直属の執事・霧墨絵利亜によるとっさの判断で、二人はほとんどダイビングするように地面の上に伏せて、『流れ弾の爆風』をかわしたのだ。
「にししィ、恋は盲目だねェ」
人間離れした戦闘能力を持つ月島桜は、自分で倒した例の魔物を防壁にして難を逃れたようだ。
半眼の下にアイシャドーにも似たクマを作る猫背の彼女に、盾にされた四足獣の魔物は少しだけグロテスクな形状になっている。

「純の場合は周囲に対して、だけどね」
そして月島と一緒になって魔物の影に飛び込んだ夢村しをりが皮肉を継いだ。
目が痛くなるくらいの明るいトーンで染めた金髪や、オシャレと言うよりは他者を威嚇するためにだらしなく着崩している桜桜高校の女子制服、乱暴な口調は、反抗期真っ最中といったイメージを目にする者に植えつける不良みたいな身なりの少女ではあるが、そこで彼女の本質を見抜ける人間は少ないだろう。
「……キテル？」
「――ウン、キテル」
夢村しをりという少女は、たとえ自身に危険が迫っていても、誰かを見捨てたりしない。
片山右京、片山左京。
『流れ弾の爆風』が押し寄せていたのに、普段通りぼーっと突っ立っている双方の腕を引っ張って、月島のもとまで避難させたのは夢村だ。
この双子の先輩方には、もう少し自分たちで危機管理を徹底して欲しいものだった。
「わ、私たちも大丈夫、です」
しどろもどろな物言いを聞いただけで、オカルト研究部全員が発言者を特定できる。
神咲みくるしかいない。
彼女は霧墨が仕留めた方の魔物をシェルターにしたようだ。
他にもそこには社交性ゼロの少年・稲葉泉と彼の幼馴染みである美少女・岸光、オカルト研究部随一のミステリアス・黒子さんが隠れていた。
界隈にたちこめていた硝煙のベールが、時間の経過と共に薄らいでいく。
そして、粉塵の濃度が最も高い爆心地に二つのシルエットが浮き彫りになった。

白瀬黒羽の背中と膝裏に、それぞれ右腕と左腕を回して抱き寄せる黒乃純白の姿だ。
一体どこにそんな筋肉がついているのか、いつもの草食系具合からは比べ物にならないほど今の彼は凛然たる風貌で屹立し、稲葉泉にも負けないくらい堂々としていた。
まるで花嫁を守る新郎のよう。
捕らわれの姫を救出した勇者のよう。
そして、愛を誓い合った二人の幸せを阻害する脅威・四足獣の魔物はすでに新郎の手によって撃退されていた。
黒乃純白。
彼の超能力は摂取したカロリーの量に比例して規模、精度、速度が上昇するエクスプロージョンである。
「純白のせいでちょっと死にかけたのに、微妙に格好よく見えてる私が一番腹正しい」
夢村がジト目で言った。
「にししィ、ギャップ萌えってやつだねェ。分かるよォ、夢ちゃん。でも、だめだからねェ。純ちゃんと黒ちゃん、相思相愛なんだからさァ」
「……キテル？」
「――ウン、キテル」
月島と片山の電波姉妹がなんか言っているが、夢村は取るに足らない情報として右から左に流す。
「なあ、霧墨氏よ。純のことは斬らねぇのか？」
「ん、なんだ貴様。そんなに早く僕に斬られたいのか？」
「なんでそうなる！？」
「そんなことも理解できないのか。だから貴様は常々、僕に『頭の良いゴリラ』だと思われているんだ」
「そんなことを常々、思ってたの！？」
「まったく……貴様は親に教えてもらなかったのか？　順番は待ちましょう、だ。一般常識だろうが」

「いやいやいや俺、並んでないから！　霧墨氏に斬られるための列なんかに並んだつもりないから！」
霧墨の純白と宇佐川に対する扱いの違いは何なのだろう。
「フン。まあ、あの情けない男は、魔物を一体倒したことでプラマイゼロだ。それに比べて貴様は、雨宮中二病並みに役立たずだな」
「ぐっ、雨宮よりは使いやすいぞ、俺」
悔しそうに歯噛みする横で、霧墨はすまし顔で肩をすくめていた。
「あ、あの、ケガは？」
一方では、神咲が魔物の影から駆け出して、黒乃にお姫様だっこされている白瀬に問うた。
「大丈夫！　実はたいしたことないよ。絆創膏でも張っておけばモーマンタイさ！」
もしかして、彼女は黒乃を奮い立たせるための演技をしたのではないだろうか。
そんな思考が全員の頭の中を回流した。
「「よ、良かった……」」
ただし、黒乃と神咲は気づいていないようだ。
二人は異口同音に安堵する。
同時に、黒乃の全身から力が抜けて白瀬を地面に下ろした。
いつも通りの黒乃が帰還する。
エクスプロージョンを行使したことで、また少し痩せてしまったのではないだろうか、頬がかすかにやつれてしまったかもしれない。
「あわわわわわ怖かったあああああああああ怖かったよおおおおおおおおお黒羽ちゃん」
「よしよし頑張ったね、えらいぞう」
ぶるぶると小動物のように震える黒乃の頭を、白瀬が優しく撫でている。
「俺もう無理もうダメもうできないよおおおおおおおおおおおおおお」
言葉に出して昇華することで恐怖心を払拭するかのように黒乃が泣いていると、なぜかそれを見ていた稲葉がやけに険しい表情でカ

ップルに近づいた。
「な、何？　稲葉くん。あっ……そっか。あの、ごめん。また見境ないことやっちゃって。ほんとにごめん。皆もごめん」
だばだばと涙をこぼしながら、黒乃は頭を下げる。
それから怯えた目で皆の様子を窺うと、全員を代表するかのように稲葉が（なぜかばつが悪そうに）一歩前に踏み出して、言う。
「いや、俺たちのことは気にするな。それよりも、その、なんだ……残念だったな、純白。お前はたった今、コンシェルジュが客に対して言ってはいけないＮＯの言葉を、ものの二秒で口にしてしまった。だから、そっちの道は諦めた方がいいと思う」
「「「「「……」」」」」
「えっと、泉くん。そのアドバイス、今必要だったのかな？　ほ、ほら確認して。なんかすごく乾いた空気になっちゃってるから」
岸が冷や汗をかいて、なんとかフォローしようと努力している姿がいじらしい。
「あはは大丈夫だよ、稲葉くん！　純ちゃんはコンシェルジュになる予定はないんだから！　将来は私のお嫁さんになるもんね？」
「そうか」
「泉くん。そこは、そうか、で済ませちゃダメだと思うの。お嫁さんは職業じゃないし、そもそも純白はお嫁にはなれないし。あ、でも性転換すれば」
「そこを掘り下げるのか、光」
二人の会話を聞いていた宇佐川が、ついに稲葉を指差して吹き出した。
「たまに口を開いたと思ったらこれかよ。お前、実は俺より空気読めない男だろ」
「あんたは空気読んだ上で、空気読まないタイプよね」
夢村が呆れ成分の強い眼差しを宇佐川へと送る。
「さて、皆さん。そろそろ移動した方がいいですよ。私たちの戦闘音に触発された魔物たちが寄ってきてしまうかもしれません。今回

はなんとか対処できましたけど、次も上手く撃退できるとは限りませんから」
神無月が透明な声で、もっともな提案を述べると、
「あ、あの、すみませんっ」
すかさず神咲が小さく挙手して、珍しく一同の視線を集めた。
一斉に注目を浴びたことに神咲は体を萎縮させながらも、唇を細かく動かす。
「あ、あう……。え、えっと、雨宮くんたちは、どうする、んですか？」
「おお、そうだぜ。みくるちゃんの言う通りだ。神楽ちゃんを一人にしてはおけねぇよ。こうしている今も、俺というナイトの助けを待ってるかもしれねぇんだ」
拳をグーにして勝手に盛り上がっている様子の宇佐川を、霧墨はウザったそうに視線を突き刺した。
「だからと言って大声で叫び、僕たちの居場所を示しても危険だ。彼らには悪いが、自力で樹海を抜けてもらう他ない」
「まーた、お前はそうやって協調性のないことを言う。一年間とも苦労してきた仲だってのに、血の涙もないやつだよな。輪を乱す捻くれ者キャラか。そういうのが格好いいと思ってる時期なのか」
「うるさい黙れ斬るぞウザ川なんとか」
「『ウ』と『川』と『ん』も合致しているじゃねぇか！　本名の方が言いやすいぞ！？」
「まあまあ二人とも落ち着いてください。喧嘩していると、さっきの二の舞になりますよ」
神無月が微苦笑をもらしながら、やんわりと仲裁に入ったことで、宇佐川と霧墨はいがみ合うように睨み続けるも、口論を一度休止する。
「それに神楽ちゃんなら大丈夫だと思いますよ、宇佐川くん。なにせ計略の小悪魔ですから。あの子なら魔物も狡猾に騙して、下僕にするくらいお手の物でしょう」

「やりかねないわ」
「やりかねないねェ」
「やりかねないな」
「やりかねない、です」
順に夢村、月島、稲葉、神咲が同調する。
「君たち本当に神楽ちゃんを人間だと思ってる！？　」
魔物との遭遇から何も学んでいないようで、彼らは部室にいるみたいにギャーギャーと騒がしく討論を交わす。
「せめて右京先輩か左京先輩が雨宮たちに同伴していれば、連絡の取りようもあったのに」
夢村が爪を噛みながら、苛立たしそうに独り言ちた。
「にししィ、この世界じゃケータイも無力だしねェ。魔法も使えない私たちには苦だねェ」
「……キテル？」
「――ウン、キテル」
この電波的な双子はこうして、定期的にテレパシーによる相互の通信回線が途絶えていないか、音声チェックしている。
ただし、彼女たちテレパスは、二人の間でしか呼応できない仕様だ。
他人とのコミュニケーションは普通の人間通り、発声しなければならないのである。
「彼らとはぐれてしまってから、そこまで時間は経過していません。遠くには離れてないと思いますけど……」
言いながら、神無月は空を仰いだ。
夜の蒼黒と沈む夕日のオレンジ、白い雲がバランスよく溶け合って、調和的なグラデーションを生み出している。
絵師が筆を取ったら、とても素晴らしい絵がキャンバスに載りそうな光景が広がっている。
それでも、森の中はすっかり宵の口に入っていた。
急に心細い雰囲気が、オカルト研究部メンバーの背筋に忍び寄る。

すると、誰もが無言で移動を開始した。
とにかく、一秒でもはやく人工の灯があるところに行きたかったのだ。
彼らは再び、足場の悪い樹海を突き進む。
「というか、誰も雨宮さん単身の心配はしてあげないんだ……」
ふと、列の最後尾周辺を徒歩する黒乃がボソっと呟いた。
「あはは。大丈夫だよ、純ちゃん。あまみーなら今頃、いつものお気に入りポーズをキメながら渋い声で、『総員第一種戦闘配置。ミッションコード一〇四γ――サルベージを発令。……これより、世界を敵にする』とか言ってるよ」
右の手のひらで顔面を覆い隠しつつ、開いた人差し指と中指の隙間から右眼を覗かせる白瀬。
直立する体はなぜか、黒乃に対して右半身を斜めに向いていた。
「そ、そだね」

∞　∞　∞

「総員第一種戦闘配置！　ミッションコード一〇四γ――サルベージを発令をする！」
「……君、本当にそのポーズとセリフが好きだよね。寝言と、それから何の伏線もなく唐突に言い出すくらいには気に入ってるね？」
「ふ、それは、どうかなエージェント神楽坂。君は私の脳内を観測できるのかね？　それを証明することなど誰にもできないのだよ。まさに俺の頭の中はシュレディンガーの猫箱さ」
「君みたいな人種は、その手の言葉も好むよね。証明だの観測だの、すぐに言いたがる気がするよ」
「そこで辟易するのは、人として未熟な証拠だぞ、エージェンツッ。人間とは思考の生き物なのだ。それは創造神に反逆し、自らの手で獲得した人類初の武器。それを自ら唾棄してどうするつもりだ。これから君は、どう生きていくつもりなのだ」

「どうでも良いから、もう少し速く歩いてくれないかな。それとも、もう一度、空を飛んでみるかい？」
「……遠慮しておこう。まだ私の出る幕ではない。それに、さっき確認したばかりではないか。まだどこにも人工物は見当たらなかった。見渡す限り、森森森のオンパレードだよ」
「それがわかっているのなら速く歩きたまえ、とアタシは言ってるんだよ、雨宮」
「はい」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1615ba/

世界で最後の魔王が泣くとき。

2012年1月6日21時51分発行